

土佐清水市の民俗伝承(5) **「お藤が轟^{とどろ}」** 市史編集委員長 田村 公利

「お藤が轟」は、三崎地区益野に伝わる伝説に登場する。益野川の上流・奥益野を一里ほど遡った所に「お藤が轟」と呼ばれる淵がある（資料1参照）。ここに以下のような悲話が伝わる。

淵近くの農家に美しい娘が住んでいた。娘はあるとき、淵の水面を鏡にして髪をといていた。髪が水面に落ちると、小蛇がそれをくわえて水中に沈んだ。お藤はそれをおもしろがって髪を小蛇に見せびらかしていると、小蛇は突然大蛇に変化し、お藤を淵の底に引きずりこんでいった。いつしか村人は、お藤はこの淵の主である竜蛇に魅入られ、捕らえられたのだと思うようになった。ここに竜蛇とお藤を祀った祠と両親を祀った二つの石碑が存在すると伝えられる。

*** *** *** *** ***

大正15年3月、南海水力電気から益野川に水力発電所を建設するため、地域住民の了承を得たいとの打診が益野地区に伝えられた。地区では部落総会を開き検討した。当時、ほとんどの家庭が夜間の灯としてランプを使用していた。一部では肥松を焚いて灯火としていた家々さえ存在していた。電気というものの実態がまったく理解できていない状況であった。

総会では、益野川流域の「お藤が轟」の淵底に潜む藤神社（資料2参照）の主（祭神の大蛇）が年に一度、浜益野の海岸に海水を浴びに下っていくのにダムが障壁となり、往き来できなくなるとの意見が出された。ここではまだまだ近世生活の名残や伝説の世界が残存する時代であった。それだけ古くから形成されてきた自然や生命に対する畏敬の念が失われずに保たれていた。山を切り拓き、道を作るにしても自然に負担をかけずに稜線に沿いながら土木工事をしたのは、高度経済成長期以前までである。最近は無理に自然を改変し、直線道路や長いトンネル工事が増えた。自然への負荷がかかり過ぎている今日の開発に私たちが留意しておく必要がある。

連日連夜の部落総会での討議を経て、ついに会社側が次の措置を講ずることで何とか部落の了承を取り付けた。「お藤が轟」にまつわるエピソードである。



資料1 お藤が轟の淵



資料2 淵の上方に安置される藤神社

「真念庵物語(5)」 「真念建立の道標」(三原分岐に1基所在)

市野瀬地区の三原分岐、市野瀬橋の東に6基の道標等の石造物が集積されている。その中の1基(右下写真)に“四國遍路の父”真念が建立した道標が存在する。四国内では約200基存在するといわれているが、高知県内では、5基(香美市松本に2基、三原村上長谷に1基、宿毛市平田町中山に1基、市野瀬橋の東に1基)現存している。ちなみに三原村上長谷に所在する道標は、唯一紀年銘が刻され、貞享四年銘を有する。



↑市野瀬橋の東に集積される6基の道標等の石造物(左写真)、真念建立の道標(右写真)。

【編集後記】

今年に入り、ある図書館の職員(司書)さんと懇談する機会があった(土佐清水市外の図書館職員)。図書館には、様々な調べ学習の相談がある。ほとんどの方は、きちんとした対応で、最後にはお礼の言葉をいただくという。中には、自分が調べるべきことを司書さんに命令する方もいるようだ。そういう方は、自称「郷土史研究家」と言い、上から目線で命令口調の方が多いと言う。

私事、高知大学大学院で社会科教育学修士課程を履修していたとき、師匠・岡田俊裕教授(地理学)は、ヒントとなるような示唆は与えてくださったが、簡単に答えを教えてくださいのようなことはなかった。「調べ学習」とは、自立した学問への果敢な挑戦であり、苦労したその筋道が答えを自力で導いたときの、大きな自信と活力につながっていくと思う。

一流の料理人は、弟子に手取り足取り教えないという。弟子は師匠と生活する中で、その技術を盗んでいく。つまり与えられるものではなく、自分からつかみ取っていくもの、それが学問であろう。

最近の若者は、柔らかい食物を好む傾向があるという。しかし、柔らかい食物ばかり食べているとかたい物を食べなくなってしまう。延いては、アゴの発達にも良くない。言い換えれば、分かりやすい話や授業ばかりだと脳の発達にとってあまり良いことではないはずだ。難解な論文や講義を聴くことも、時には大切であろう。

「調べ学習」について、もう一度考え、捉え直していきたいところである。(田村)